

# 就職支援の現場から —秋田職業能力開発短期大学の取り組み—

秋田職業能力開発短期大学校 電子情報技術科

住居環境科

早川 英  
金子 健幸

## 1. はじめに

秋田職業能力開発短期大学校（以下、当校という）では、平成22年度から25年度にかけて、4年連続で進路決定率100%を達成している。さらに近年の平成24年度、25年度は年内12月までに100%に到達している。もちろん学生本人や教職員の努力が大きな要因であることは確かであるが、試行錯誤と熟慮の上、築き上げた学校としての取り組みもある。当校よりも更に効果的な手法を展開している教育機関も

数多く存在するし、各学校の置かれた状況により方法論は異なるが、多少でも他校の就職支援の参考になればという思いから、当校の取り組みについて紹介させていただくことにした。

ここで進路決定率とは、卒業生のうち、就職や応用課程をはじめとするほかの教育訓練機関への進学など、安定した進路を決定できた者の割合をいい、近年、就職率に代わる大学等の指標として用いられ始めている。当校においては、進路に関してこの指標を用い、学生募集および求人開拓を行っている。



図1 就職活動とその支援に関わるフィッシュボーンチャート（1年次）

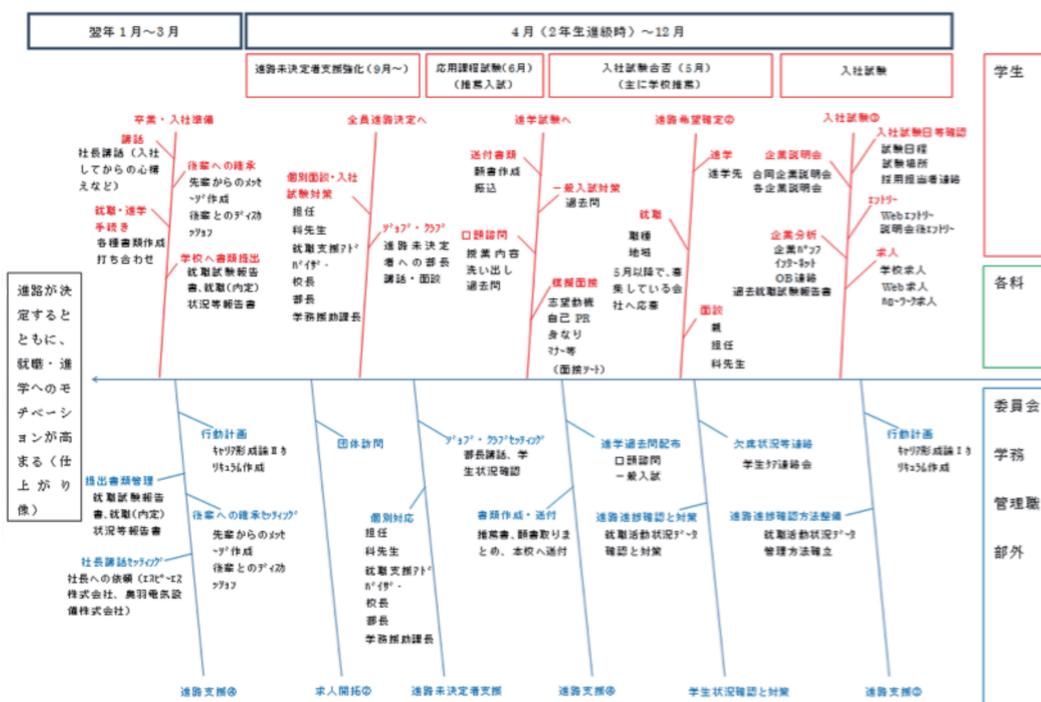


図2 就職活動とその支援に関わるフィッシュボーンチャート（2年次）

## 2. 進路決定に関わる環境

当校は生産技術科，電子情報技術科，住居環境科の3科（各科20名定員）からなる。就職希望者が約3分の2，東北職業能力開発大学の応用課程を含む進学希望者が約3分の1である。就職希望者のうち，県内希望者が3分の2を占める。したがって，就職活動の方法や一般的な動向もとらえつつも，地方特有の部分に重点を置くことが必要となる。地方都市における就職活動は，一般的にいわれているように何社も受験して内定を取るといった方法ではない。企業数が限られることからピンポイントでのマッチングが要求され，学校と企業のパイプが重要となる。

## 3. 就職支援の計画

就職支援のスケジュールは，過去の経験を踏襲する形で組み上げられていた。しかし，それを分析してみると，非効率性や無駄，また，場合によっては支援の不足などが存在することがわかった。そこ

で，必要かつ効率的な就職支援を行うために就職活動とその支援を解析し，学年ごとに目標を設け，それに至るために必要な項目を整理した特性要因図（フィッシュボーンチャート）を作成した。図1が1年次，図2が2年次のものである。このフィッシュボーンチャートは要素を関連づけるだけでなく，時期的な目安と担当者・部署についても考慮して作成されている。これを参考に2年間の計画を策定している。学生への説明，保護者への説明用に要点のみを示した計画が図3となる。



図3 就職活動と支援の年間計画

#### 4. 学生の就職意識の向上（各種講話）

就職支援でまず重要となるのが、学生の就職意識の向上である。特に専門課程では、就学期間が2年間と短いため、入学してすぐに就職活動の準備に入らなければならない。そこで、学生の動機づけを行うために、各段階において講話等を設けて、意識の高揚を図っている。

第1段階は、入学直後の新入生ガイダンスである。ここでは、就職支援の担当責任者（当校では就職対策委員長）が、就職活動の全体像を示すとともに2年間の計画を明示する。それに基づいて、入学直後から準備に取り掛かる必要性と重要性について理解させている。

学生の選択肢として、就職以外にも応用課程への進学も考えられる。進学に関しても相応の準備が必要となる。当校では4月の下旬に東北職業能力開発大学校の教員を招聘して、1,2年生合同による応用課程の説明会を実施している。1年生に対しては、早くから選択肢の1つとしての進学を意識させることが目的であり、2年生については、就職活動開始後でもあり、最終的に進路を決断するための情報を提供することができる。

6月上旬には就職活動の心構えとして、校長による講話を行い、自己分析が進みつつある中、また、SPIなどの筆記試験対策を継続的に行う必要がある時期に、モチベーションの維持・高揚を図った。

第2段階として、11月下旬には当校を良く理解していただいている企業の採用担当者による講話を行っている。これは、直前に迫った就職活動の解禁に備えて、就職意識を向上させるためのものである。採用の現場で仕事をしている方から就職活動の手順、採用試験の方法、そして、採用試験において求められるテクニックなどについて話を聞くことで、現実感を持たせる効果を狙っている。

1月中旬には「先輩からのメッセージ」というタイトルで、2年生から1年生に向けて、自身の就職活動の経験を話す機会を設けている。学生目線での就職活動の方法を、成功例や失敗談も含めて知ることができる。会社特有の話もあり、同じ会社を志望している者にとっては絶好の機会である。1年生にとっては最も身近な者から聞く話であり、より直接的な効果が期待される。

第3段階は、2月上旬に地元企業の経営者に依頼して、1,2年生合同で社長講話を実施した。企業が求める人材等の話をしていただいている。これは主に2年生対象の企画であり、卒業・就職を控えた学生に社会人となるための心構えを持たせることが目的である。1年生にとっては、今後、エントリーシート、履歴書等を作成する上でのヒントとなることを望み、聴講させている。

2月中旬にはビジネスマナーの専門家を呼び、マナー講座を実施した。2年生にとっては、入社後の準備であり、1年生にとっては、会社訪問等におけるマナーの習得を目指している。



図4 応用課程説明会



図5 社長講話に聞き入る学生

## 5. 自己分析と企業研究

当校の就職支援の取り組みにおいては、多くの項目について計画的に支援を行っている。しかし、これらの項目を当事者である学生がしっかりと受け止め、就職活動で活用できるようにしなければならない。ほぼすべての学生は、就職活動そのものが初体験であるため、先行きが見通せないことによって不安を抱えたり、すべてを吸収し完璧にしようと、がんばりすぎる学生もいる。情報を詰め込むだけでは消化不良に陥るため、確実かつ、それぞれの学生に必要なことを気づかせるツールとして、就職ガイドブック（図6）を整備した。



図6 就職ガイドブック

就職ガイドブックそのものは珍しいものではなく、どの学校でも整備している。記載内容は、就職（進路決定）活動の流れや相談窓口、面接試験や履歴書作成のポイントなどである。近頃では、企業説明会等に持ち込み、メモやスケジュールを書き込める工夫がなされているものも多い。

当校の就職ガイドブックも同様の機能を持たせているが、最大の特徴は授業科目である「職業社会論」及び「キャリア形成論」の教材として利用できることである。とくに1年生次の「職業社会論」では、今の自分を見つめる自己分析や在籍する科に関連する企業を探る企業分析も行っている。今までは漠然と考えて過ごしてきた学生も、将来を見据えるうえでは欠かせない内容である。漠然とした内容も含

め、ガイドブックに自分の考えや気持ちを記載しながら、就職に向けての意識づけをしている。

先に、就職意識向上の各段階を示したが、ガイドブックの中身もこの段階に連動している。各種講話についても、実施する目的が示されており、終了後にどのように感じたか等を記載できるようにしてある。自らが書き込み、オリジナルのガイドブックを完成させることで、就職活動のみならず将来のキャリア形成の一助になればという想いから完成した就職支援ツールである。

1年生の後半からは本格的な就職活動がスタートする。当校の所在地である大館市は、秋田県内でも最北端に位置しており、秋田市で開催される合同企業説明会に参加することも容易ではない。そのため、説明会の開催日程に合わせてバスを手配し、一斉に参加している。地方都市の学生にとって対外的な刺激は重要で、自分の動き方と他大学の学生との違いを肌で感じる機会でもある。

合同説明会のほか、個別の企業説明会も実施している。主にはOBが活躍している企業であるが、各科それぞれに関連する企業から、採用担当者、OBが来校し、学生に企業説明を行っている。実施時期は3月から6月にかけてが多く、1年生も参加できることから今後の就職活動への意識づけにもなっている。2年生はそのまま面接へと流れるケースも多く、最終的に内定につながる確率も高い。

いずれにせよ、自己分析から企業研究をしっかりと行い、就職に向けた基礎を構築することに重点を置いて支援している。

## 6. 筆記試験対策

就職試験にはSPIやCAB・GAB、一般常識、適性検査、作文等々がある。筆記試験対策は一朝一夕にできるものではなく、継続的な学習や練習が求められる。しかし、その種類の多さから、すべてのタイプの試験に対応できるように準備することは現実的ではない。しかも、企業によって用いる試験が異なるため、早くから志望企業を決めているケースを除き、効果的な対策は難しい。

そこで、各種の筆記試験に共通する内容が含まれているSPIと一般常識について対策を行っている。1つは問題集による自学自習である。もう1つはインターネット上の就職支援サイトの利用である。年8回開催されるWeb上の模擬試験を、時間と場所を設けて実施している。

当校学生の就職活動では、一般的なエントリーから受験することは少なく、主な受験対象である地元企業においては、SPIなどの試験が課せられるケースも少ない。そこで、筆記試験対策の主体を一般常識試験においている。

具体的には、就職支援業者による模擬試験を数回と対策講座である。これによって、学生が自分のレベルや得意不得意を認識するとともに勉強方法を習得する。また、教員など支援者が個々の実力を把握することで、会社選択のアドバイスに役立てることができる。従来はSPI試験対策も一般常識と同程度に重要視していたが、前述の理由から現在は縮小している。

個々の企業に対する試験対策は、その都度求人票などを参考に行っているが、過去に受験したことのある企業に関しては、その経験の活用が有効である。当校では試験ごとに就職試験報告書を作成させており、問題の種類や量、得点と可否の関連など過去のデータを蓄積し、対策に利用している。独自の試験方法の会社もあり、論文や作文のテーマ、出題方法や傾向、面接の質問内容についても大いに参考となる。これを広く利用できるように管理している。

## 7. 面接試験対策

筆記試験以上に重要である面接試験の対策としては、大きく3つの段階を想定している。

初めは11月頃に合同面接練習を1年生全員で実施している(図7)。面接だけではなく、就職活動におけるマナー講座として実施している。立ち振る舞いや表情、言葉遣いを習得するが、最大の目的は、はっきりと自分の意思を伝える発声方法と緊張せずに話せる練習である。



図7 合同面接練習

また、学生が面接者の役割を担うことで、客観的に面接時の様子をとらえることもできる。

1月頃には、他科の教員が面接者を務める交換面接練習を実施している。所属する科の教員との面接練習も行っているが、次第に緊張感が薄れていくことがデメリットであり、気持ちを引き締める意味でも実施している。また、面接者が変わることで、さまざまな指摘がなされ、新たな反省点も発見できる。この時期になると、概ね進路の方向性が決まっており、本番さながらの面接練習となってくる。

就職試験の直前では、校長をはじめ管理職との面接練習で締めくくっている。これまでの練習の成果を確認すると同時に、最後の激励をし、明るい表情で面接試験を迎えている。

これらの面接練習の流れが順調であり、結果として進路決定率につながったものと考えている。

## 8. 保護者へのアプローチ

学生の進路決定には保護者の協力も不可欠である。まずは入学式後の保護者ガイダンスにおいて、全体的な進路決定や支援の流れ、また、各科特有の進路状況等について説明し、協力を仰いでいる。

さらに、平成25年度からの試みとして12月1日の解禁日に合わせ、進路に関する問題を保護者にも十分理解していただき、学校側と綿密に連携することを主たる目的として、保護者説明会及び懇談会を実施した。保護者の関心は高く6割以上の保護者が参加し、そのうち8割が面談を行った。保護者にとっ



図8 保護者懇談会

て最も関心が深かった内容は、大学校における授業の状況や生活の様子についてであったが、今後の進路についても少なからず意識が高まったようである。

具体的な志望企業が出てくる時期になると、学生と保護者の意見が食い違うことも発生するため、保護者との電話対談や、必要に応じて三者面談なども行っている。

## 9. 学生指導の体制

就職を含めた学生指導は、各科担任が中心となって取り組んでいる。また、担任は就職対策委員であり、進路決定に向けたサポートを中心的に行っている。そこに、各科教員、学務援助課及び就職支援アドバイザーが加わり、あらゆる方面からのサポートを行える体制を整えている。

進路決定に向けて順調に推移する学生もいるが、試験に失敗して挫折を味わう学生も多い。サポートという意味では、進路決定に至らない学生への精神的なサポートも大切といえる。

当校では就職活動中の全学生を対象に、ジョブクラブを開催している。進路に関して苦戦している学生に対して、放課後の面談や講話、面接練習、筆記試験対策等を通して、就職活動を支援するクラブである。他の学生の進路が決定して行くにつれ、焦りを感じるのは当然である。そのような時、しっかりと地に足を付けてそれぞれのゴールへ向かえるようサポートしている。

時期としては2年生の夏休み前頃に開講し、主に

面談しながら現状と今後の方針を確認している。

進路決定に至らない原因はさまざまであるが、自分が何をしたいのかははっきりと見えていないケースが多い。つまり、自己分析の不足である。この時点で再度ガイドブックを活用するなどして、学生の将来について掘り下げた話をしている。

学生1人ひとりの方向性や考え方は異なるので、サポートは完全に個別対応となる。担任だけの対応では限度があるため、就職支援アドバイザーの援助を受けながら、学生が納得するサポートを実施している。

進路決定の進捗状況については、ほぼ定期的に開催している就職対策委員会にて確認している。同時に、不安を抱える学生がいないか、進路決定するうえで困難な状況があるか等、情報を共有するための学生ケア連絡会も行っている。

## 10. まとめ

以上述べてきたような支援の結果としての進路決定率を図9に示す。最近の3年間の月別の進路決定率である。すべての年度末には進路決定率100%を達成している。特に最近の2年間は12月中に達成することができた。

また、進路決定の月別分布を図10に示す。就職内定が遅れると選択肢が狭まるため、早期の進路決定は、より良い就職を果たすことにつながる。その実現のためには、まず、早期の就職活動の開始、きち

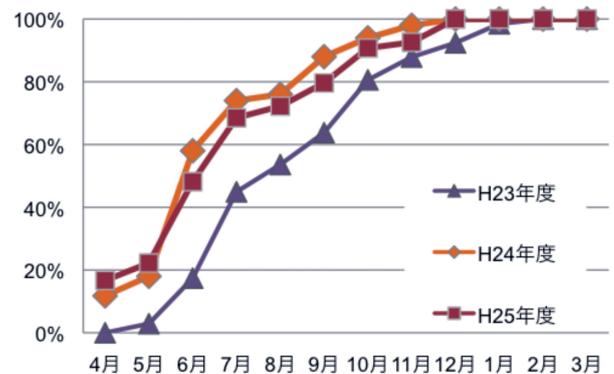


図9 進路決定率の推移

んとした意識づけによって、進路決定を前倒しにすることが重要である。そして、分析に基づいたイベント等の開催、各種ツールの準備と利用、それを効果的に運営する体制が必要である。もちろん、学生本人と支援に携わるすべての職員との協力と努力の結果であることを忘れることはできない。努力を重ねノウハウを積み上げてきた当校の先輩職員諸氏に改めて敬意を表したい。

当校における就職対策の現状と手法をお伝えした。これが1人でも多くの求職者の幸福に結び付くことを心から願っている。

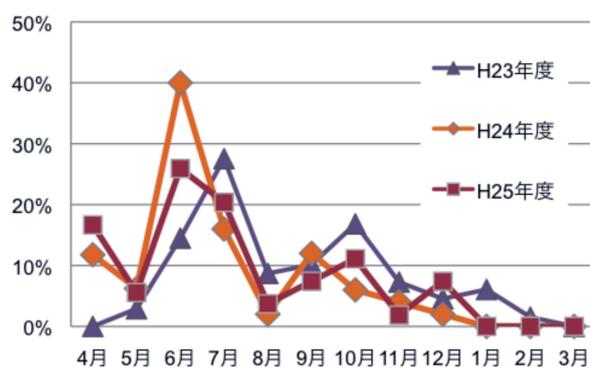


図10 進路決定の月別分布